

令和5年度学校自己評価報告書

学校教育目標		○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。				
本年度の重点目標		○本校における観点別評価の方法を確立しながら、指導と評価の一体化を進め、生徒が主体的に学べる授業づくりにつなげる。 ○落ち着いた授業習慣の定着を支援するとともに、生徒会を中心に委員会と連携し、生徒主体の行事の企画・運営に努める。□ ○3年間、4年間を見通したキャリア教育を推進し、生徒の自己実現を図るために必要な職業観・勤労観を育成するとともに、生徒一人ひとりの進路実現を目指す。□ ○生徒が快適に学べる環境づくり及び組織的な教育相談体制づくりを進め、健康・安全や防災・減災に努める能力の育成を図る。□				
	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評定	改善方策
1 教務課	(1) 生徒が授業内容を振り返る場面を毎時設定し、その振り返りを教員がチェックすることで、生徒の学びの変化を把握し、評価の適正化や授業改善につなげる。	①評価および授業改善の一環として、生徒が授業を振り返る場面を毎時間設定し、生徒の学びや生徒の変化を把握し、適正な評価へつなげる。 ②観点別評価の適正な運用を通じて、生徒の能力・資質向上につながるよう、授業者が働きかけを行う。	①授業アンケート 《まとめ・振り返りの設定》 教員 5年度：90.0% 4年度：89.3% 3年度：データなし 評価基準：A = 85%以上 B = 70%以上 C = 70%未満 ②授業アンケート 《観点別評価の実践》 教員 5年度：93.4% 4年度：92.9% 3年度：82.3% 評価基準：A = 85%以上 B = 70%以上 C = 70%未満 ③授業アンケート 《観点別評価を活用した生徒の資質向上への取組》 教員 5年度：83.3% 4年度：データなし 評価基準：A = 70%以上 B = 50%以上 C = 50%未満 ※授業アンケート・学校評価アンケートの結果については、全回答における「あてはまる」「ややあてはまる」の回答割合を指す。以降同じ。	2学期授業アンケート(非常勤を含む教員37名に対して実施、30名より回答。回答率83.3%)の結果は、左の通りである。1学期よりは上昇も依然として回答率が低く、データとして不十分な感否めぬが、評価基準はAに達し、観点別評価自体は実践のハードルが下がってきているように思われる。 今後の検証箇所は、評価の適正化および生徒への還元である。1学期の懸案事項であった評価自体のわかりやすさは、1学期に比べ改善は見られるようだ(※)。一方で、観点別評価の生徒への還元は「ややあてはまる」が約55%に達し、生徒の学力伸長に資するという点では、多くの教員が手探り状態と言える。評価の適正化や評価方法の充実をはじめ、今後も授業改善に精力的に取り組んでいく必要があるだろう。 (※)生徒による授業評価(121名中、106名から回答。回答率87.6%)では、「評価にわりにくさがある」という質問のA・Bの割合が、33.4%から8%に減少している。	B	評価の適正化や観点別評価を活用した生徒の基礎学力の伸長について、引き続き取り組んでいく必要がある。本校は学校規模が小さく、各教科の教員も少ないので、教科を超えて取組の共有や情報交換を図っていく必要がある。働きかけの1つの柱として、公開授業週間を活用していきたい。公開授業週間での課題設定等は、参考になる事例が多く、ありがたかったとの声も一部であり、一定の効果をあげているものと考えられる。どのような課題を設定し、それを通じて実践経験を積み、教員の引き出しをどう増やしていくか、その点について教員間のニーズを見極めながら、取り組みを強化していきたい。
	(2) 「授業スタンダード」や授業参観、校外外の公開授業を活用し、各教員が授業改善に向けた不断の取組を行う。	6月と11月の公開授業週間ごとにテーマやスタイルを設定し、授業づくりの幅を広げるきっかけを、教務の側からしかける。	学校評価アンケート 《公開授業週間への取組》 教員 5年度：92% 4年度：97% 3年度：92% 評価基準：A = 85%以上 B = 70%以上 C = 70%未満	2学期公開授業の参観シートは58枚(一部未提出あり)となり、1学期に比べて参観者数は増えた。また、学校評価アンケートの結果も、92%となるなど、まずまずの成果を上げたものと感じている。	A	2学期は1学期に比べ日程的に余裕があったこともあってか、参観者が増えたように思う。2週間の公開授業週間の設定は長期になるが、次年度以降も、この形での実施を検討していきたい。

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評定	改善方策
2 生徒課	(1) 生徒の基本的な生活習慣が定着し、規範意識を身につけることができるよう支援する。	生徒が、「1人1人の学ぶ権利を守る5箇条」に意識して授業に取り組むよう、全教員で統一して繰り返し指導を行い、規律ある落ち着いた雰囲気での学習環境を作る。	学校評価アンケート 《授業を大切に》 教員 保護者 生徒 5年度：97% 95% 91% 4年度：94% 98% 96% 3年度：97% 97% 92% 評価基準：A=95%以上 B=85%以上 C=85%未満	昨年度同様に、多くの生徒が授業に真面目に取り組み、全体的にはルールを守って落ち着いた学校生活を送っていた。しかし、大なり小なり一定数の問題行動は起こっており、効果的な指導の難しさとともに、根気強く全職員で多方面から指導を継続していくことの必要性・重要性を改めて感じている。	B	今後も根気強く継続して指導を行っていく。早めの報連相の徹底と情報共有をしっかりと行い、足並みを揃えた指導を行うとともに、複数で対応していく。また、各所と連携をとり、問題行動の未然防止、早期対応に努める。
	(2) 生徒が学校行事や部活動・委員会活動等に積極的に参加し、社会人基礎力を身につけることができるよう支援する。	多くの生徒が積極的に諸活動に参加できるよう、生徒会を中心に学校行事の企画・運営に努め、行事内容の充実を図るとともに、各種委員会と協力し、個々の生徒の活躍の場を広げる。	学校評価アンケート 《学校行事・生徒会活動・部活動に積極的に参加》 教員 保護者 生徒 5年度：100% 98% 92% 4年度：100% 98% 96% 3年度：100% 99% 94% 評価基準：A=95%以上 B=85%以上 C=85%未満	全ての校内外の行事において、生徒会中心に多くの生徒たちの主体的で積極的な参加があり、個々の生徒の個性に応じた活躍が多く見られた。地元の夏祭りへの初参加や、制限を解除しての文化祭では、生徒の持つ可能性の大きさを感じた。また、生徒会と各委員会との協力的体制もでき、活動の幅が広がっている。	A	近年の行事の活性化と生徒の積極的参加により、個々の生徒が活躍する場が増えている。今後も生徒の「やってみよう」という思いや声は、可能な限り取り入れ、生徒たちの持つ可能性の伸長を図るとともに、経験値を上げさせたい。
3 進路課	(1) キャリア教育を充実させ、生徒の能力の伸長を図るとともに、適切な進路情報の提供を行って進路意識の向上を目指す。	① 生徒の実態把握に努め、進路行事と進路総探を検討・実践し生徒の進路意識の向上を目指す。また進路課だよりやHPを通じて、生徒や保護者への適切な進路情報の提供を行う。 ② 各学期に進路希望調査を実施し、教員間で情報を共有すると共に、生徒一人ひとりの実態に即した進路指導に役立てる。 ③ 今未来手帳の活用を促し、進路講演会や日々の連絡での利用頻度を上げる。	① 学校評価アンケート 《キャリア教育の実践》 教員 保護者 生徒 5年度：100% 98% 92% 4年度：100% 98% 99% 3年度：100% 97% 92% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ② 進路希望調査にて未定生徒の推移で評価する。 進路希望未決定者数（割合）（次年度卒業学年） 5年度：9/30(30%) 4年度：8/26(30.7%) 3年度：5/24(20.8%) 評価基準 A：未定の生徒が20%未満 B：上記が20%以上40%未満 C：上記が40%以上 ③ 学期末ごとにアンケートをとって振り返りと働きかけを行い、最終アンケートで評価する ③ 2学期末での生徒アンケート結果 手帳利用が「一週間に数回」以上の生徒の割合 1年 44% 2年 11% 3A 14% 卒業学年 17% 「活用できていない」 1年 17% 2年 15% 3A 14% 卒業学年 33% 評価基準 A：手帳利用が「一週間に数回」以上の生徒が60%以上 B：上記の生徒が40%以上60%未満 C：Bに満たない場合	生徒の実態を把握し、進路行事・総探の内容を検討・実践した。行事ごとの生徒の自己評価も高かった。ただ行事を受けての振り返りの時間をあまり設けることができず、自己学習の場がなかったように思う。保護者向けの進路課だよりは定期的に発行できたが、生徒向け・HPへの掲載が滞ったため、適切な進路情報の提供があまりできなかった。 昨年度より未定者数は減っている。担任・学年団・進路課の働きかけだと感じる。また進路希望を把握し、個々への声かけを継続して行っていた結果でもありと思う。手帳利用に関しては、2学期末の時点で27.4%となり低い数値となった。しかし一方で、手帳を使うことは便利だという回答は80%超、またメモをとることは大切だという回答は90%超から100%と非常に高かった。意識はあるが、メモをとる行動につながらなかったようである。自分の生活の中への定着にはまだ時間を要すると共に進路課をはじめ担任・学年団側の働きかけの不足や課題があると考えられる。ただ卒業学年には「卒業後のメモ帳使用」についての質問を課した際、75%の生徒が「使う」と答えた。今後につながる回答を得られたと考えている。	B	生徒の実態を的確に把握し、進路行事の精選、総探での学習内容の修正等を行いたい。また定期的に進路課だよりの発行、行事ごとのHP掲載を行い、生徒への働きかけと共に保護者への情報提供を行っていききたい。 未定者数の減少を受けて、4月より本格的な進路活動が始まるので、生徒への声かけ・働きかけを3学期と春休みを有効に使い、4月から進路への意識づけをしっかりと行っていききたい。 手帳利用に関しては、年1回手帳の有効性や使い方の講演会を実施している。今後も継続実施すると共に、担任・各学年団と進路課が連携して、具体的な使い方を示したり、働きかけを行って定着度を上げていきたいと考える。

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評価	改善方策
3 進路課	(2)就労体験や進路相談を通して、個々の生徒の進路希望に応じたきめ細やかな進路指導に努める。	①アルバイトやインターンシップ参加の働きかけを行い、進路意識の向上に効果的に機能するよう努める。	①学校評価アンケート 《進路指導の実践》 《キャリア教育の実践》 教員 保護者 生徒 5年度：100% 92% 92% 4年度：97% 95% 97% 3年度：100% 91% 95% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	今年度もアルバイト情報の掲示をしたり、各クラスにファイル置いて情報の提供を行った。またアルバイトを探している生徒がいれば個々に声かけもしている。企業によっては求人情報と共にアルバイト募集も持参して訪問されるケースが増えてきた。学校の実態を知っている企業だと安心感がある。 インターンシップへの参加者数も増えてきている。コロナ禍ではなかなか難しい状況であったが、5類に移行した上、慢性的な人手不足での求人増のため、企業もインターンシップの受け入れに積極的であると感じる。個々の生徒によっては、状況を把握しきちんと時間をかけて参加を見極めていく必要がある。ただ自分の進路を考えていく上で自己理解にもつながること、社会性も学べることで有効であると考えている。また保護者も進路に向けて意識が高くなりつつあり、インターンシップに関して前向きに捉えている傾向があると感じる。今後も積極的な参加への働きかけを行ってきたい。	B	来年度もアルバイト情報の掲示をしたり、各クラスにファイル置いて情報の提供を行ってほしい。またアルバイトを探している生徒がいれば個々への声かけも継続して行ってほしいと思う。また総探の時間を使うなどして、履歴書作成や電話のかけ方などを進路学習の一貫として取り上げていくことで少しでもハードルを低く感じられるよう進路課としても動いていきたい。 インターンシップに関して、年々参加生徒数が増えているため、進路意識の向上が少しづつでも感じられる。ただ参加者数に応じて対応をお願いする企業・事業所数も増えているため、生徒対応や事務作業など教員の負担増はかなりのある。少しでも負担を減らしていくため、業務内容の精選が必要だと感じる。また多様な生徒が多いので、生徒への理解を促した上での受け入れ企業の選定も併せて大事になってくると考える。
			①各学期で実施しているアルバイト調査でアルバイト状況を把握する。 5年度 アルバイト実施者 49名 (40.5%) 4年度 アルバイト実施者 38名 (40.4%) 評価基準 A：参加生徒が50%以上 B：上記が30%以上50%未満 C：上記が30%未満			
			②学校評価アンケート 《担任による面接、進路面談》 教員 保護者 生徒 5年度：100% 92% 92% 4年度：97% 95% 97% 3年度：100% 91% 95% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満			

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評価	改善方策
4 厚生課	(1)健康・安全・防災に関する知識の啓発と生徒が主体的に健康で安全な生活を営む意識の向上と能力・態度の育成を図る。	①健康・安全及び防災に関して生徒や学校の実態に即した情報の提供を印刷物・掲示物・電子媒体によって行い、健康・安全に対する知識の啓発に取り組むとともに防災に対する意識の向上を図る。 ②生徒の心身の健康状態を的確に把握し、疾病治療の必要性を個に応じた懇談や紙、電子媒体によって知らせる。	①学校評価アンケート 《健康の増進と安全保持、防災・減災意識の向上》 教員 保護者 生徒 5年度： 97% 95% 93% 4年度：100% 92% 99% 3年度：100% 97% 96% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ②《疾病治療率》 眼科 歯科 5年度：32.2% 16.6% 4年度：57.1% 17.2% 3年度：62.5% 21.9% 評価基準：A=70%以上 B=50%以上 C=50%未満	新型コロナウイルスが5類に移行したが、コロナ対策は引き続き行った。アンケート結果は昨年同様高い評価を維持している。 eこねつと等の様々な伝達媒体で未受診者への啓発を行ったが、昨年より疾病治療率は低くなり、改善に至っていない。	B	来年度も生徒への健康・安全に関する呼びかけを様々な伝達媒体を活用したり、委員会活動で取り組ませたい。 来年度も引き続き各課・年団と連携して生徒・保護者への啓発を行い、必要であれば個別に対応する。
	(2)ユニバーサルデザインを基本とした教室整備を進めて、落ち着いた学習できる環境づくりに取り組む。また、効果的な相談支援・指導体制の確立を図る。	①生徒に対して、ユニバーサルデザインの周知、広報を行い、ユニバーサルデザインに立脚した教室整備に取り組む、学習しやすい環境作りを行う。 ②教室内の環境美化に係る重点目標を一定期間ごとに定めたり、ポスター作成など美化委員会を中心に生徒に実践を促す。 ③教育相談などの印刷物や掲示物で情報の提供を行うと共に、配慮を要する生徒へのきめ細やかな教育相談・特別支援教育を推進し、SC、SSW、教育相談員や外部機関と教職員間の連携を図る。	①学校評価アンケート 《教室整備》 教員 生徒 5年度： 97% 85% 4年度：100% 84% 3年度： 97% 78% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ②学校評価アンケート 《環境美化意識》 教員 生徒 5年度： 97% 90% 4年度： 97% 94% 3年度： 97% 90% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ③学校評価アンケート 《特別支援》 教員 保護者 生徒 5年度：100% 95% 82% 4年度：100% 88% 84% 3年度：97% 94% 87% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	アンケートは高い評価となっている。ユニバーサルデザインに基づいた教室づくりが定着している。 今年度も環境美化の意識が高い評価となった。特に清掃ボランティアの参加は全校生徒の半数までとなっている。 教員・保護者は、高い評価となっており、教育相談への理解は定着しているが、生徒の一部には教育相談を受けることができると感じていない評価となっている。今後も、学校全体での教育相談の周知や個別に生徒へ呼びかけを進める必要がある。	B	「厚生課だより」や各学年のクラス通信などで「教室のユニバーサルデザイン」を取り上げ、生徒への周知を行う。 今年度、一部のクラス等で、清掃が不十分だったところやゴミの乱雑さが目立つところもあり、来年度も引き続き美化委員の活動として環境美化の活動を進める。 来年度、教育相談等の活動を身近に思えるものにするため、教員・生徒・保護者の三者での連携をより密に行っていく。また全学年の生徒の様子等を教育相談や各年団、関係機関等で共有し、対応していく。

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評価	改善方策
5 年 団	(1) 学校生活や保護者・地域との連携の中で、生徒が主体的に役割を果たし活躍できる場面を通して、自己有用感を実感できるように導く。	(1年団) 保護者への連絡、生徒面談を綿密に行い、状況を把握・年団全体で共有することで、適切な指導を組織的に行き、より良い学校生活を送ることができる環境を整える。 個々の適性を理解し、自己有用感を高められるよう学校行事などに積極的に参加するよう促す。	(1年団) 学校評価アンケート 《保護者との連携》 保護者 5年度 100% 4年度 88% 3年度 93% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	1年団保護者における学校評価アンケートの結果は、回答者全員が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と答えており、その中でも7割以上が「よくあてはまる」と答えている。(回答数40/57)担任を中心に保護者との連絡を密に取り、家庭と連携・協力することができ、生徒それぞれの個性に応じた役割を持たせて、取り組ませることができた。とくに、隣のクラスとの情報交換を大切にすることで、複数での指導ができる体制を作ることができた。	A	1学期は家庭からの情報が少なく、生徒理解に苦労したこともあった。時間を見つけて早いうちからコミュニケーションをとるようにしていきたい。
		(2年団) 各種学校行事を通して、生徒が主体的に取り組む機会を提供するとともに、クラスや学年を越えたコミュニケーションの場を設定することで、他者との協働学習の中で自己理解に努める。	(2年団) 学校評価アンケート 《社会に適應する力》 教員 生徒 5年度：97% 89% 4年度：94% 92% 3年度：92% 89% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	大きな行事である体育祭・文化祭ではクラスの中で自分の役割を見つけ協力しながら活動することができた。特に2年生の全クラスが行ったステージ発表ではどのクラスも全員が当日の発表に携わることができ、達成感を得られたように感じた。文化祭以降で人間関係の変化が見られ、新たな友人ができた。笑顔を見せながらコミュニケーションを取ることができるようになったりする生徒が増えた。	A	徐々にコミュニケーションの取り方が身に付き、主体的に行事等に参加できるようになった生徒が多く存在した。しかし、いまだに分からないことや疑問に思ったことを質問したり、自分から調べたり、発表をしたりすることが苦手な生徒が多いため、次年度の進路活動や将来のことを考える際にはPBLの視点を持って学校生活に取り組みたい。
		(3, 4年団) 面談や保護者との連携を通して個々の生徒理解を深め、それぞれの生徒に適した学校内外での活動の場面を設定したり積極的に参加させたりすることで、主体性や自己有用感を醸成する。	(3, 4年団) 学校評価アンケート 《自分は役に立つ人間だと思う》 生徒 5年度 64%(3, 4年生 69%) 4年度 57% 3年度 55% 評価基準：A=60%以上 B=55%以上 C=55%未満	学校行事や部活動などでは上級学年として様々な場面で活躍し、また自分の役割を責任をもって果たす姿が見られた。さらに、多くの生徒が地域の行事にも参加し活動した。学校評価アンケートでは、69%の生徒が「自分は役に立つ人間である」と回答しており、自己有用感をもって学校生活を送ることができている。	A	集会や通信などで「人の役に立つこと」について発信したことが生徒の理解と行動につながり自己有用感の醸成につながったと考えるので、今後も継続していきたい。
	(2) 個に応じた進路実現へ向けて、教育活動や生徒との対話の中で「前に踏み出す力」、「チームで働く力」、「考え抜く力」を育成する。	(1年団) 授業への取り組み方や課題の提出状況を教員が把握するとともに、生徒自身が「できた」と実感し、次への意欲につながるよう、段階的な実行力を身に付けさせる。 互いを認め合いながら目標に向かって努力する雰囲気を醸成することで、規律性、働きかけ力を身に付ける。	(1年団) 学校評価アンケート 《自分自身の進路実現》 生徒 5年度 96% 4年度 97% 3年度 95% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	1年団生徒における学校評価アンケートの結果は、96%の生徒が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と答えており、その中でも7割以上が「よくあてはまる」と答えている。担任による面談等で、将来の進路について一緒に調べたり、インターンシップやアルバイトを進めたりすることができた。全体的に見ると、規律性や努力する雰囲気は比較的備わりつつある。また、リーダーシップをとることができる生徒が少しずつ増えてきており、行事を盛り上げようとする雰囲気をつくってくれた。	A	2学期後半から、提出物の期限を守る雰囲気や少しづつ崩れてきた。細かい声掛けが必要な生徒には、引き続き支援していく。また、SOSを出せない生徒もおり、困ったときの対処法を個別に考えて行く必要がある。

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評価	改善方策
5 年 団		(2年団) 学期ごとの面談に加え、日頃より生徒との対話や個人面談を日常的に行うとともに教育相談員やスクールカウンセラーなどの各種相談の場と機会を設定することで、生徒の進路意識の向上と相談体制の構築に努める。	(2年団) 学校評価アンケート《必要ときに相談ができる》 生徒 5年度：77% (2年生) 82% (全体) 4年度：76% (1年生) 92% (全体) 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	2年生の保護者は86%が相談の機会があることを知っていると答え、教職員は100%が教育相談の体制へ肯定的な意見を述べている。しかし、2年生の生徒は必要ときに相談ができると思っている生徒が77%にとどまっておき、昨年度から上昇が見られなかった。教職員の主観としては相談ができていてと感じていた生徒でも対応が必要なことがわかった。教員間の連携は密に図られているので、今回の結果以外にも学校生活アンケート等の各種アンケート結果をもとに個別対応を強化する必要があると感じた。	C	今年度は生徒からのアプローチに教員間で連携をし、対応ができていた反面、教員側からのアプローチの頻度が減少していた部分が存在する。今後は進路実現に向けて教員・生徒・保護者の三者での連携をより密にする必要がある。他学年からも生徒の様子などの情報収集を行い、些細なことでも声掛けをしていきたい。
		(3, 4年団) 学校生活を通して、規律性や傾聴力といった社会人基礎力の土台となる能力、また、手帳を活用させることで、計画力や自己管理能力を身に付けさせる。	(3, 4年団) 学校評価アンケート《社会に適應する力》 教員 生徒 5年度：97% 89% (3, 4年生 81%) 4年度：94% 92% 3年度：92% 89% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	教職員は97%という回答に対して3・4年生は81%という結果になっている。規律性や場面に応じた行動について教員間で共通理解を図り継続して指導していたがまだ不十分であったと感じる。また、手帳については、中間期と比べると講演会や進路学習などで活用している生徒が増えたが、日常的に使用できている生徒は少なく、手帳を開く習慣づけが徹底できていなかった。	C	教員間で統一して指導を行ってきたが、具体的な指導場面や指導方法などの共通理解を図り、3年間または4年間という長期的な視点で指導することが重要だと感じている。
6 学 校 運 営	(1) 地域社会や外部機関との連携、および広報活動を通じて本校の魅力を発信し、開かれた学校づくりに努める。	① 保護者や地域の方に対して、授業公開等により、本校の教育活動を知ることができる機会を増やすよう努める。地域や校種の異なる学校及び関係機関との交流の中で、生徒が企画段階から参加するなど、主体的に取り組める場面を設定する。	① 学校評価アンケート《開かれた学校づくりに努めている》 教員 保護者 5年度：100% 94% 4年度：100% 97% 3年度：100% 96% 評価基準：A=95%以上 B=90%以上 C=90%未満	① 新型コロナウイルスの扱いが5類に変更になったことで、体育祭や文化祭など、保護者が来校し、生徒の姿を見る機会を増やすことができた。生徒の校外での行事として昨年度までの清掃ボランティアや花の苗贈呈式などに加えて、真備・船穂総おどりが加わり、活躍できる場が増えたことにより自己有用感の高まりにもつながったと考えている。また、同時に本校のよさのアピールにもつながっている。	B	① 今年度は外部との交流として真備・船穂総おどりに加え、防災講演会をきっかけとして学童保育へのボランティアにつなげるなど、拡大傾向にあった。今後も積極的な交流を進めたいが、生徒及び教職員の負担が過度にならないよう調整をする必要性を感じている。
		② ホームページに最新の情報が掲載されるように更新を進め、また、日々の出来事を「陵南ニュース」に積極的に掲載するよう努める。	② ホームページのブログ記事「陵南ニュース」の更新(月ごとの平均回数) 5年度：年間7回(月平均0.6回) 4年度：年間24回(月平均2回) 3年度：年間30回(月平均2.5回) 評価基準：A=3回以上 B=2回以上 C=2回未満	② ホームページ本体については必要に応じて最新情報に更新できていたが、「陵南ニュース」について投稿された記事の数は例年と大きな差はないが、各担当が作成後、掲載されるまでに時間がかかり、まとめた投稿となった。時期を逸した状態であり、保護者や中学生に対するアピールにはならなかった。		
	(2) 課長・主任を中心とした協力・協働体制の確立を図るとともに、各課・年団や委員会等の横のつながりを密にすることにより、組織力のある学校づくりに努める。	通常業務の中で報・連・相に密にすることに加え、年団主任会、課長会議を定期的に開催することにより情報共有を図るとともに課長・主任が課・年団を越えて業務を見渡せるようになる。	学校評価アンケート《協働体制づくりが進んでいる》 教員 5年度：92% 4年度：91% 3年度：92% 評価基準：A=95%以上 B=90%以上 C=90%未満 年団主任会、課長会議による情報交換の頻度(主任会は月3回、課長会議は月1回を目安)	各種行事やOJTの取組など、様々な場面で協働して業務にあたる姿が見られたものの、一部で仕事を抱え込んで滞ることもあった。年団主任会議はほぼ毎週開催し、生徒情報交換及び生徒指導の方向性を確認することに貢献してきた。課長会については2学期以降毎月開催し、各課長間で業務の情報交換ができた。	B	校務分掌表に「必要な場面にに応じて、課長の了解を得て、分掌の枠に係らず協力・協働体制をとることとする」とあるように、時期に応じて柔軟な動きができるように課長・主任を中心として全体を見渡せるよう、情報交換を進めたい。また、年団主任会や課長会が情報交換だけでなく、課題に対して議論できる場としても機能するようにしていきたい。